

# 介護者の自助グループにおける心理的機能に関する研究ノート

兵藤 好美 ・ 田中 宏二\* ・ 田中 共子\*\*

Research on the relation between relaxation and promotion factors of stresses from home caregiving revealed that the number of years as a member of caregivers group had positive effect against such stresses. In this study, we prepared questionnaires focused on psychological function of caregiver's self-help group. Survey sheets were mailed to 385 caregivers joining in such groups, and 176 valid answers were collected from February to March, 2000. The average age of caregivers was 64.5 years old, and most of them are spouses and daughters-in-law in 3 to 4 people families. The average period as a member of a group is 4.2 years. They satisfied with the activities, and are willing to be continuing members. One third of them always or often come to the meetings, and they ask public service when they attend. Demand for knowledge and technique on caregiving is high, and the group fulfill most of the demand. The members are also willing to tell information to others.

**Keywords :** Family care givers, Self help group, Support, Elderly, Burden,

## I. 問 題

我々はこれまで高齢者の在宅介護者に関する一連の心理学的研究を行ってきたが(田中・田中・兵藤, 2001), その結果は介護が高ストレス事態であることを裏づけている。家族の中で最も中心になって介護労務を担う者を「主介護者」と呼ぶが, 主介護者のストレスとそのため的心身の健康悪化の問題は高齢化社会の陰の部分であり, 看過できない社会的な問題といえよう。

昨年度は在宅介護者を対象とした質問紙調査を実施し, 「介護ストレスサポートモデル」を提唱して, ストレス反応の緩和要因と促進要因の関係について

検討した。その結果, 介護者のメンタルヘルスの維持に, 「介護者の会」への入会年数が肯定的な影響を持っているという示唆的な知見を得た(兵藤・田中・田中, 投稿中)。さらに, 介護者が介護に携わるうちに, 次第に介護労務を受容し体験として昇華させていくという「認知的成長段階」を想定した場合も, 「介護者の会」の入会年数が肯定的な影響力を持つことが示唆された(兵藤ら, 1999)。

ここでいう「介護者の会」は, 自治体のバックアップを受けて地域に展開される自主的な介護者の集まりである。地域の公民館などで定期的に会合が持たれ, お互いに情報交換をしたり質問や相談をしたり,

---

1) 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科 博士課程

\*岡山大学教育学部 総合教育講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

\*\*岡山大学文学部 700-8530 岡山市津島中3-1-1

A note of Psychological Study on Caregiver's Self-help Group

Yoshimi HYODO, Koji TANAKA\* and Tomoko TANAKA\*\*

The Joint Graduate School (Ph. D. Program) in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume Yashiro-cho Kato-gun, Hyogo, 673-1494

\*Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tushima-naka, Okayama 700-8530

\*\*Department of Behavioral Sciences, Faculty of Letters, Okayama University, 3-1-1 Tushima-naka, Okayama 700-8530

2) 本研究は, 平成10-12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)10610119「高齢者の在宅介護者に対するソーシャルサポート介入に関する基礎研究」(代表者・田中宏二)を受けた。

本研究は, 日本心理学会第63回及び64回大会(1999年及び2000年), 日本健康心理学会第12及び13回大会(1999年及び2000年)において発表された内容に基づくものである。

へはわ何気ない話をしたり、あるいは手芸や歌などのレクリエーションを行ったりしている。会には世話役の方がいて、会合の準備などに携わっている。会員宅へは会報が郵送され、我々の介護者調査もその郵送の機会に質問紙を同封させてもらった。

上記の示唆的結果からは、この会においていわゆる「自助グループ」としての心理的機能が存在することが推察される。そのため先の調査に続いて、我々は「介護者の会」の心理的機能に焦点を当てた質問紙調査を企画し、同年に実施した。本稿はその集計結果について、概略を報告するものである。

我々の研究が、介護者の心身の健康を守る実効性あるシステムとして会が機能していることを示し、その仕組みを解明できるならば、介護者問題への有効な対策の一つとして、この活動へのさらなる支援を促すことができる。会の心理的な意義を明らかにすることは、今後の組織化や運営についての展望ももたらしてくれよう。

これは高齢化社会対策としての提言のみならず、生涯教育の在り方への示唆も含んでいる。自助グループは支え合いと共に自己教育の場ともなっているように思われる。同じような体験を共有する者たちが、それぞれを鏡として何事かを悟り、仲間と共にいる心の安定の中から自分を見つめ直し、内的な成長を果たしていく場という意味では、教育の機会が提供されているといえる。人が何事かを学ぶ場は学校のみではなくて、人生の至る所、生涯に渡って学びが行われている以上、広義の「学び」の場をどう設定しどう生かしていけるかが問われているといえるだろう。

先進国の学校教育は、抽象的な学習パターンの習得や知識に重点が置かれ、実際的な知恵をあまり重視していないという指摘がある (Segall, M. H, Dasen, P. R, Berry, J. W, and Poortihga, Y. H, 1996)。しかし人生で介護という事態に遭遇して、そこから何を学びどう成長すればよいのかは、学校で教わる事柄には含まれない。様々な事態での対処能力や、経験から学び成長する力を養う場を、生涯に渡ってどう実現できるだろうか。その答えの一つが自助グループであり、その活動の場を設定して学習機能が発揮されるよう環境を整えていくことが、生涯学習の範囲と機会を広げていくことにつながるものと思われる。

## II. 方 法

### 調 査 対 象

要介護老人を介護する家族の会である「介護者の会」及び社会福祉協議会の協力を依頼し、調査を実

施した。〇県下の2市、4地域の「介護者の会」の会員455名に会報誌を郵送する機会を利用し、郵送法で213名の有効票を得た (回収率46.8%)。調査期間は2000年2月～3月。

### 調 査 項 目

- (1) 性, 年齢, 続柄, 同居人数
- (2) 「介護者の会」への入会年数, 参加状況: 「介護者の会」への参加状況を4段階 (1: 殆ど欠席～4: 必ず出席) で尋ねた。
- (3) 「介護者の会」に出席する間の要介護者に関する世話の方法: 「介護者の会」に出席する間の要介護者の世話の方法について, 4つの方法 (デイケア・ホームヘルパー, 代わりの人, 本人 (被介護者) が留守番, その他) から複数回答可能で尋ねた。
- (4) a. 「介護者の会」への期待サポート: ①情緒的サポート (同じ体験を持つ人に, 介護の悩みや愚痴を聴いて, 相談にのって欲しい), ②解放場所サポート (一時でも, 介護の場所から離れて, リフレッシュしたい), ③交友的サポート (趣味や興味のあることを一緒にしたり, それについておしゃべりしたい), ④介護情報サポート (介護に関する具体的な知識や技術を教えて欲しい), ⑤福祉情報サポート (福祉サービスに関する情報を教えて欲しい) の計5項目に関し, 求めている程度を4段階 (1: 全く求めているない～4: 非常に求めている) で測定した。尺度の項目は, 先行研究 (兵藤・田中・田中, 1998) において使用したサポート (情緒的サポート・道具的サポート) 項目を参考にし, 「介護の会」におけるサポートに適切と思われる項目を作成したものである。
  - b. 「介護者の会」におけるサポート認知 (得られたと思うサポート): 「介護者の会」への期待サポートと同様のサポート項目 (情緒・解放場所・交遊・介護情報・福祉情報サポート) について得られた程度を4段階 (1: 全く得られていない～4: 充分得られている) で測定した。
- (5) 「介護者の会」のメンバーに対するサポート提供意欲: 「介護者の会」への期待サポートと同様のサポート項目 (情緒・解放場所・交遊・介護情報・福祉情報サポート) について, 他の参加者に提供していきたいと思った程度を4段階 (1: 全く思ったことはない～4: 非常にそう思う) で測定した。
- (6) a. 「介護者の会」の参加による介護者負担感 (CBS) の変化の程度: 新名・矢富・本間・坂田 (1989) の介護者負担感評価尺度 (CBS) を参考に, 先行研究 (兵藤ら, 1999) から, 今回の調査目的に適切と思われる代表的な4項目 (①家族や

親類が自分の気持ちをわかってくれず、家庭内がうまくいかないこと、②要介護者の伝えようとしていることが、よくわからない、③この先ずっと介護を続けていかなければならない、④今後、要介護者の状態や病気のことについてどう対応し、介護していけばよいかわからない)を選択した。そして負担に思う変化の程度を4段階(1:前より感じるようになった~4:前より随分感じなくなった)で測定した。素点を合計し、高得点ほど負担感軽減の度合いが大きいことを示す。

b. 消耗感の変化の程度:中谷(1992)の家族介護者用バーンアウトスケール(MBI)を参考に、今回の調査目的に適切と思われる代表的な3項目(①介護で消耗感(くたくたになった)を感じる、②最近、周囲の人に冷たく当たっていると感じる、③介護することに、充実感を感じなくなった)を選択した。そして消耗感の変化の程度を、負担感と同様な4段階で測定した。素点を合計し、高得点ほど消耗感軽減の度合いが大きいことを示す。

(7) 「介護者の会」の有用性の度合いの評定:尺度の項目は、岡(1985)のセルフヘルプグループの機能分類における6つのグループ・プロセス(①普遍化、②比較相対化、③情報付与、④枠組付与、⑤価値転換、⑥文化形成過程)を参考にし、「介護者の会」の有用性について適切と思われる項目を作成した。そして、その6項目(①自分だけが悩んでいるのではない、②人の悩みを聴きながら、自分の悩みが客観的に見える、③お互いに役に立つ情報を交換できる、④なぜ問題になるのか、それをどう取り組んだらよいかわかるようになる、⑤介護することにも意味を見いだせるようになり、前向きに捉えられる、⑥会のメンバーとの連帯感ある活動を通じて、介護に対する自分なりの信念が持てるようになる)に関し、有用性の程度を、4段階(1:役に立っていない~4:大変役に立っている)で測定した。素点を合計し、高得点ほど有用性の度合いが高いことを示す。

(8) 「介護者の会」の参加によるコーピングに関する変化の程度:和気(1993)の家族介護者対処スタイル測定尺度を参考に、今回の調査目的に適切と思われる代表的な4項目(①介護の大変さを、家族や周りの人に訴える、②家族の介護をするのは、当然のことだと考える、③介護に関する情報を集める、④介護は仕方ないことだとあきらめる)を選択した。そしてコーピングの変化の程度を5段階(1:前より随分するようになった~5:前より随分しなくなった)で測定した。素点を合計し、高得点ほどコーピング変化の度合いが高いこ

とを示す。

- (9) 「介護者の会」に対する満足感の度合い:「介護者の会」に対する満足感の程度を4段階(1:全く満足していない~4:非常に満足している)で測定した。
- (10) 継続意志:「介護者の会」参加の継続意志の程度を4段階(1:あまり続けていきたくない~4:是非続けていきたい)で測定した。
- (11) 「介護者の会」からの欠席時の電話連絡の有無:  
a. 会の様子を知らせる・b. 安否を気遣う電話の有無について質問
- (12) 会内親密NW:「介護者の会」会合時以外も連絡を取り合う人数
- (13) 「介護の会」以外の出来事:入会後から現在までに介護状況や介護の取り組みが大きく変化する出来事の有無

### III. 結 果

#### 1. 主介護者についての背景

##### ①主介護者

回答の得られた介護者213名について、うち女性が181名で、年齢は平均64.1(SD11.1)歳であった。その内訳は60歳代(33.2%)が最も多く、次いで70歳代(27.6%)、50歳代(22.4%)、40歳代(7.9%)、80歳代(6.5%)、30歳代(1.4%)、100歳代(0.5%)の順であった。なお、被介護者との続柄は、配偶者(36.1%)が最も多く、次いで嫁(26.4%)、娘(16%)、息子(5%)、実母(0.4%)の順であった。主な介護者は配偶者及び嫁であることが判る。また同居人数は、3人(24.2%)が最も多く、次いで2人(20.6%)、4人(14.4%)、5人(13.9%)、1人(6.2%)の順であった。介護者を含め4人家族及び3人家族が多いことが判る。

「介護者の会」への入会年数については、各地域で事情が異なるが、平均4.2年で、3年(18.8%)が最も多く、次いで2年(15.7%)、5年(13.2%)、1年(11.7%)の順であった。また参加状況(Fig. 1)について「ほとんど欠席」が最も多く、次いで「たまに出席」、「大体出席」、「必ず出席」の順であった。また「介護者の会」参加中の要介護者の世話(Fig. 2)は、デイケア・ホームヘルパー等の公的サービスに最も多く委ねられており、次いで要介護者本人が留守番、代わりの人に頼む、その他の順であった。

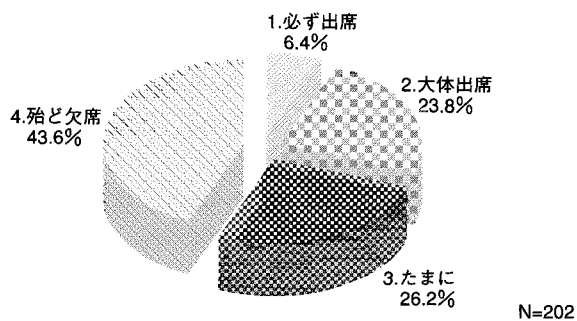


Fig. 1 「介護者の会」参加状況

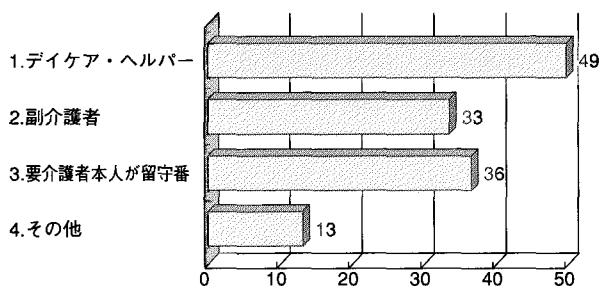


Fig. 2 「介護者の会」出席方法  
(要介護者の世話の依頼先)

## 2. 「介護者の会」への期待サポート & 実行サポート

「介護者の会」への期待サポート & 実行サポートの結果については、(Fig. 3) に示す。期待サポートは、「福祉サービスに関する情報を教えて欲しい」(3.25) というサポートへの期待が最も高く、次いで「介護に関する知識・技術を教えて欲しい」(2.96)、「一時でも介護の場から離れてリフレッシュしたい」(2.95)、「介護の悩みやぐちを聴いて相談にのって欲しい」(2.58)、「趣味や興味のあること

と一緒にしたり、それについておしゃべりしたい」(2.55) の順であった。

次にその期待サポートが、実際にはどの程度実際に得られているのかについては、「福祉サービスに関する情報を教えて欲しい」というサポートが最も得られており、次いで「介護に関する知識・技術を教えて欲しい」、「介護の悩みやぐちを聴いて相談にのって欲しい」、「一時でも介護の場から離れてリフレッシュしたい」、「趣味や興味のあることを一緒にしたり、それについておしゃべりしたい」の順であった。期待サポートの順番と比べると、「一時でも介護の場から離れてリフレッシュしたい」と「介護の悩みやぐちを聴いて相談にのって欲しい」の順番が入れ替わっているが、ほぼ同様であった。

また期待するサポートが実際に実行されているかどうか、期待サポートと実行サポート間の差について検定を行った (Fig. 3)。その結果 1. 「介護の悩みや相談をしたい」については 5%，それ以外の 2～5. の項目については 1% の有意確率で実行サポートの値の方が低いことが明らかになった。

## 3. 「介護者の会」の他の参加者への提供希望サポート

「介護者の会」の他の参加者へ提供していききたいと思うサポートの程度 (Fig. 4) については、「まだ参加していない人にも、会に参加することで介護から離れる場所をもってもらいたい」、「福祉サービスに関する情報を伝えていきたい」というサポート提供希望が最も大きく、次いで「介護に関する知識・技術を知らせていきたい」、「趣味や興味のあることを一緒にしたり、それについておしゃべりすることで、一緒に気分転換してもらいたい」、「介護の悩みや相談にのりたい」の順であった。

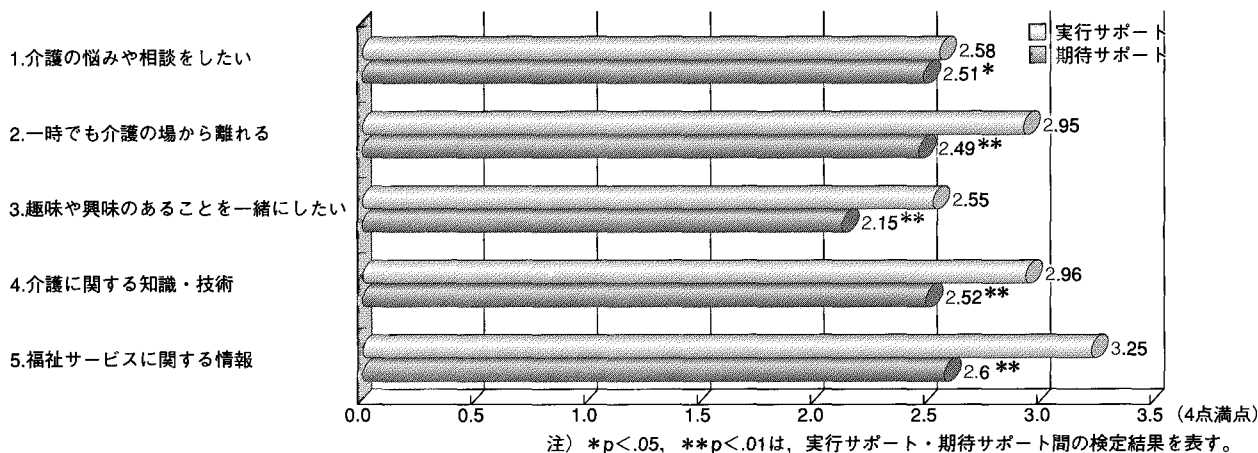


Fig. 3 「介護者の会」への期待サポートと実行サポート

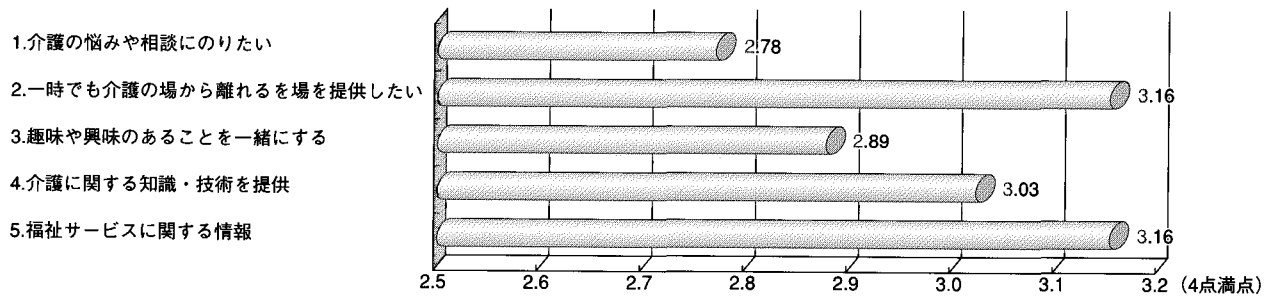


Fig. 4 「介護者の会」での提供希望サポート

#### 4. 「介護者の会」参加による介護負担感と消耗感の変化度について

「介護者の会」の参加前と比べて、負担感の感じ方や介護者の思いはどのように変化したか、その変化度 (Fig. 5) については、「家族や親類が自分の気持ちをわかってくれず、家庭内がうまくいかないことが負担である」という項目が最も軽減度が高く、次いで「要介護者の伝えようとしていることが、よくわからないことが負担である」、「この先ずっと介護を続けていかなければならないことが負担である」、「今後、要介護者の状態や病気の変化にどう

心対応し、介護していけばよいのかわからないことが負担である」の順であった。

また消耗感については、「最近、周囲の人に冷たく当たっていると感じる」という項目が最も軽減度が高く、次いで、「介護でくたくたになったと感じる」、「介護することに充実感を感じなくなった」の順であった。

#### 5. 「介護者の会」の効果

「介護者の会」が、どのようなことに役だっていると思うのか (Fig. 6) については、「自分だけが悩んでいるのではない、みんな同じように悩んでいる

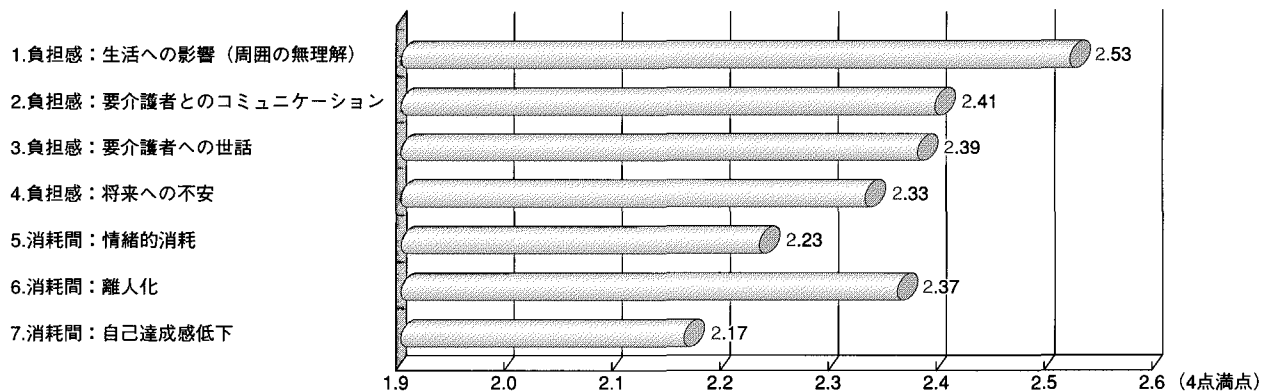


Fig. 5 「介護者の会」参加による介護者負担感と消耗感の変化度

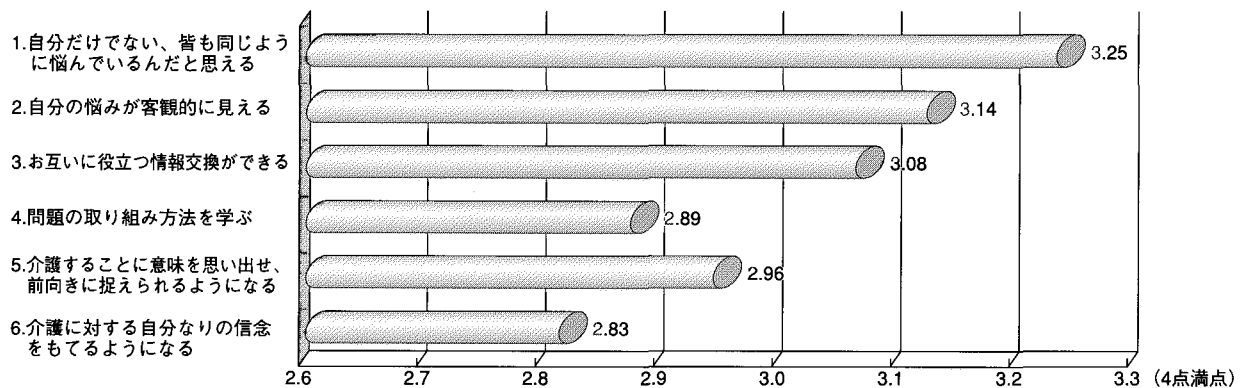


Fig. 6 「介護者の会」の効果

のだと思えること」が最も高く、次いで「人の悩みを聴きながら、自分の悩みが客観的に見えること」、「お互いに役立つ情報を交換できること」、「介護することにも意味を見いだせるようになり、前向きに捉えられるようになること」、「なぜ問題になるのか、それにどう取り組んだらいいのかわかるようになること」、「会のメンバーとの連帯感ある活動を通して、介護に対する自分なりの信念がもてるようになること」の順であった。

### 6. 対処の変化度

「介護者の会」の参加前と比べて、介護の大変さの対応方法はどのように変化したか、その変化度について (Fig. 7) は、「介護の大変さを、家族や周りの人に訴える」という項目が、最も軽減度が高く、次いで「介護は仕方ないことだと、あきらめる」、「家族の介護をするのは当然のことだと考える」、「介護に役立つ情報を集める」の順であった。

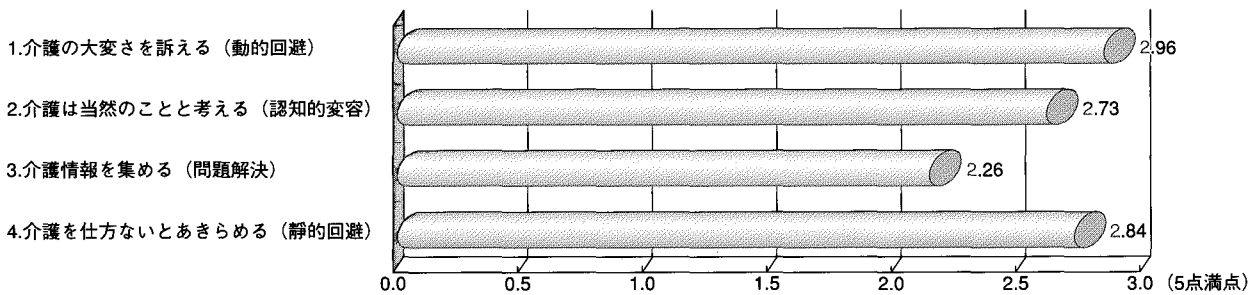


Fig. 7 「介護者の会」参加による対処の変化度

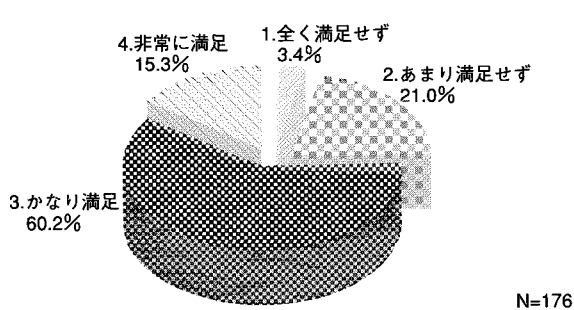


Fig. 8 「介護者の会」への満足度

### 7. 「介護者の会」への満足感

「介護者の会」に対する満足感 (Fig. 8) については、「かなり満足している」が最も多く、次いで「あまり満足していない」、「常に満足している」、「全く満足していない」の順であった。

### 8. 「介護者の会」への継続意欲

「介護者の会」に対する継続意欲 (Fig. 9) については、「できれば続けていきたい」が最も多く、次いで「是非続けていきたい」、「どちらとも言えない」、「あまり続けていきたい」が3%であった。

### 9. 「介護者の会」の参加者からの電話

「介護者の会」に出席できなかった時に、電話をもらうことがあるかどうか (Fig. 10) に関して、参加者の人達から会の様子を知らせる電話が「ない」と答えた人が62.0%、「ある」と答えた人が38.0%であった。

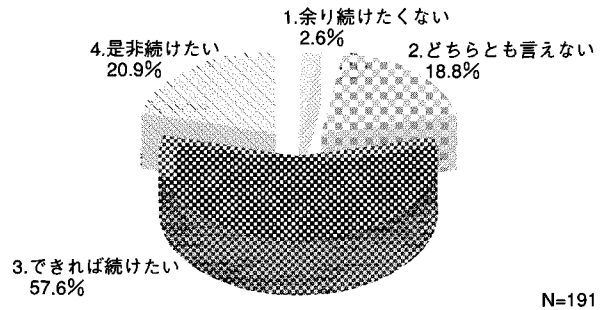


Fig. 9 「介護者の会」の継続意欲

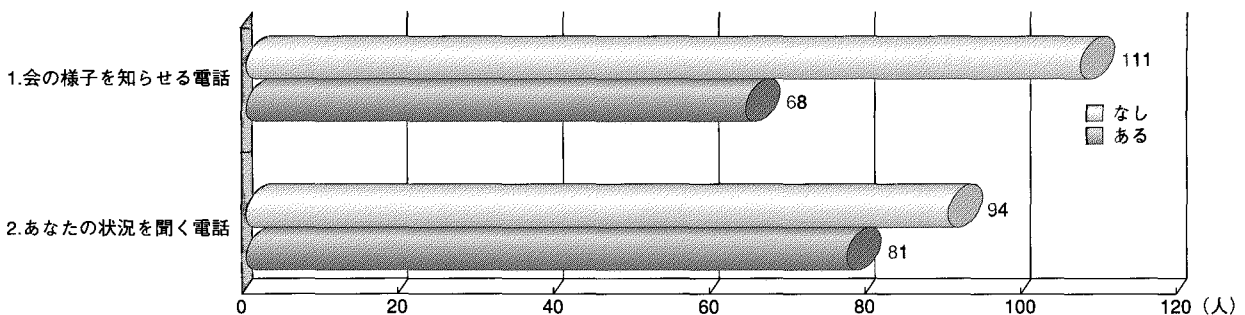


Fig. 10 「介護者の会」不参加時における他の参加者からの電話

次に参加者の人達から、状況を聞いてくれる電話をもらうことがあるかどうかについて、「ない」と答えた人が53.7%、「ある」と答えた人が81名46.3%であった。

#### 10. 「介護者の会」における親密な関係にある人数

「介護者の会」の参加者の中で、会が終わった後でも、連絡（電話等）を取り合う親しい人が何人いるか（Fig. 11）について、人数は平均1.35（SD 1.66）人であり、最も多かったのは「いない」と答えた人で、次いで2人、1人、5人、4人いると答えた人の順であった。

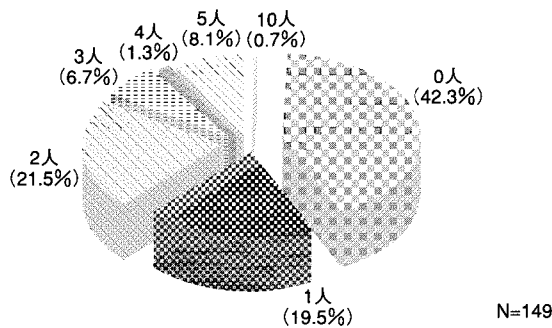


Fig. 11 「介護者の会」における親密な関係の人数

#### 11. 入会後の介護状況や介護の取り組み上の変化

入会后「介護者の会」以外に、介護状況や介護の取り組みが大きく変わったりするような出来事があったかどうかについて尋ねた。「なかった」と答えた人が71.2%、「あった」と答えた人が28.8%であった。

### IV. 考 察

今回の回答者は、平均年齢は60才を越えており、その続柄は配偶者や嫁を含み、3～4人家族が多い。介護者の会には平均4年あまり入会し、会への満足度や継続意欲は総じて高く、大体および必ず出席する人が3割弱おり、公的サービスなどに介護を頼んで参加している。会に出られるかどうかは、介護役の代わりがいるかどうか大きく依ることであり、会の参加への潜在的ニーズを充足させるためにも、こうした支援策の充実が望まれる。

情報や知識・技術を第一に求めているが、それはかなり満たされており、また他人にこれらを伝える意欲も高い。介護者の会が情報的サポートを提供しあう場として、かなり実用的な機能を果たしていることがわかる。また会合に参加することで、実質的に介護を離れる場が提供されていることへの認識も高く、他の介護者にはこの点を勧めたいといっている。介護の知識・情報を交換することを第一の機能

と認めながらも、実際には介護の時空間からの開放が果たされることが、心理的に評価されていることが推察される。

周りの人に気持ちを分かってもらえないことからくるストレスは、同じ立場の者と一緒にいることで軽減されてくるようである。被介護者を理解できないことからくるストレスも、対応の仕方を助言してくれる場があることで和らいでくるものと思われる。周りの人への冷たい対応は減る一方、大変さを訴えることは増えている。周囲の理解を得ようとする方向へ、対処が変わっているようである。

これは会への入会と他の介護者との出会いによって介護者の人的環境が変化したことで、被介護者や家族との関係においても、捉え方や対応の仕方が変わってきていることを示唆する。対人関係面の肯定的な影響が出やすくなっていることは興味深い知見である。自分だけが悩んでいるのではないという思いや、自分を客観視するという効果も、認知の枠組みを変えて、周りの人への対応の仕方を変える要因になっているのかもしれない。

セルフヘルプグループで生じるプロセスは認識志向のプロセスと行動志向のプロセスに分類され、さらに認識志向のプロセスは6段階に分かれる（岡, 1985）といわれる。「介護者の会」の有用性は、この6つのプロセスの中の、1. 普遍化過程（悩んでいたのは、私だけではなかった）、2. 比較相対化過程（話し合う内に違いが見えてくる）、3. 情報付与過程（その問題について、情報が与えられる）に大きく寄与していることが示唆されている。即ち、岡が提唱するセルフヘルプグループの3つの基本要素（「わかちあい」、「ひとりだち」、「ときはなち」）の内の「わかちあい」の特性が色濃く反映されていることがわかる。例会でのメンバー同士の「わかちあい」から、自分だけではなかったという安堵感や共感の喚起により、自尊心の回復がなされ、自己開示へと進むこと、新たな情報が得られるプロセスが認められる。さらに介護をはじめとする、人生における耐え難い、また引き受けがたい困難に出会った時、人はどう生きていくべきなのか、これらは、これまでの学校教育で教えてこなかった部分でもある。時を越え、場所を違えて、「介護」という引き受けがたい困難に出会い、悩む人同士が「介護者の会」という場所でまじわり、教え、学びあい、お互いを救い合うという意味では「生きる力を育む教育」の場となっていると考えられる。介護の活力を回復するこの場は、学校教育で強調されがちな、努力すれば達成が果たされるという、言うなれば努力達成モデル的な考え方では解決しきれない、人の一生の間

に起こる問題に対するアプローチを考えていく上で、多くの示唆を与えてくれている。

介護者の会での親密さは、会の活動を離れての個人的なネットワークにまで発展している場合もあり、コミュニティでの私的なソーシャルネットワークの形成を媒介する機能も付随しているようである。高齢者のネットワークが加齢と共に縮小するのに加えて、介護による拘束のため家を離れることさえ自由にならず、さらなるネットワークの硬直化・縮小化が予想される。しかしながらこれらの現象は、逆方向のネットワーク拡大として、高齢者の介護を考える上で、今後大きな意味をもつものと思われる。

ただし介護者の会に参加しながら、取り組みが変わるような大きな出来ごとがあった人たちも3割弱程度いるので、会の効果についてはさらに詳細な解析を経て結論を出していきたいと考えている。

## 謝 辞

調査にご協力くださいました「介護者の会」の会員の皆様、社会福祉協議会の方々、ならびに関係者の皆様に深く感謝いたします。

## 【引用文献】

- 兵藤好美・田中宏二・田中共子 1998 エイジングストレスサポートモデルによる高齢者の精神的健康に関する実証的研究 健康心理学研究, 11(1), 1-15.
- 兵藤好美・田中宏二・田中共子 2001 介護サポートモデルの検討 健康心理学 投稿中
- 中谷陽明 1992 在宅障害老人を介護する家族の燃えつき — “Maslach Burnout Inventory” 適用の試み — 社会老年学 36, 15-26.
- 中谷陽明 1996 第10章 家族介護者の負担感高齢者の家族介護と介護サービスニーズ 東京都老人総合研究所社会福祉部門編 光生館226-306.
- 新名理恵・矢富直美・本間昭 1991 痴呆性老人の負担感に対するソーシャルサポートの緩衝効果 老年精神医学雑誌 5, 655-663.
- 岡知史 1985 セルフ・ヘルプ・グループの機能について：その社会的機能と治療的機能の相互関係 大阪市立社会福祉研究会研究紀要 4, 73-93.
- 岡知史 1994 セルフヘルプグループの援助性について 上智大学社会福祉研究 平成7年度年報, 3-21.
- Segall. M. H, Dasen. P. R, Berry. J. W, and Poortihga. Y. H, 田中國夫・谷川賀苗(訳) 1996 比較文化心理学 初版 北大路書房154-183 (Segall. M. H, Dasen. P. R, Berry. J. W, and Poortihga. Y. H, 1990 Human Behavior in Global Perspective. An Introduction to Cross-cultural Psychology. NewYork. U. S. A. Pergamon Press Inc.)
- 田中宏二・田中共子・兵藤 2001 高齢者の在宅介護者に対するソーシャルサポート介入に関する基礎研究(平成10-12年度 科研費研究成果報告書)
- 高木修・西川正之 2000 援助とサポートの社会心理学 北大路書房 95-103.
- 和気純子 1993 在宅障害高齢者の家族介護者の対処(コーピング)に関する研究 社会老年学 37, 16-27.